

平成26年度学校評価(自己評価)報告書		附属幼稚園	
		評価単位	評価のまとめ
A	教育課程	1. 教育目標	○年度当初に園全体や学年で共通理解をし、基本をおさえる際の指標になっている。 ○年度末の評価結果を生かし、新年度の会議でも共通理解することを継続していきたい。
		2. 教育課程の編成	○年度初めや週案作成の際に、立ち戻って計画を編成する柱として「学びの概要」を活用した。 ○「学びの概要」は、探究力・活用力の視点で見直し、補足等していきたい。
		3. 年間授業 日数・回数	○各学年に適した保育時間になっている。降園時間は厳守するように努めている。 ○年度後半、5歳児の降園時刻を15分繰り下げたことは集まりの時間の充実につながった。 ○保育時間は長短ではなく過ごし方の中身が大事であることを、よりわかりやすく保護者に伝える工夫は引き続き必要である。
		4. 教育活動とその成果	○拡大打合わせ会を確実に実施し、全教員が保育課題や行事に向けた確認等を共有できた。 ○保育後の振り返り、週案作成の打ち合わせなどを積み重ねることが大事にされている。担任間の話し合いに比べ、勤務時間が異なる非常勤講師との話し合いの時間は十分に確保できない現状がある。
		5. 行事	○子どもたちの生活に無理がないように精選され、内容についても工夫を重ねている。 ○新企画「夏休みのセミの羽化を見る会」は充実した内容だったので継続できるとよい。 ○運動会は、教員間で話し合いを重ねながら競技の見直しをすることができ、子どもと保護者双方により適切な内容になった。
		6. 進路指導	○5歳児、一人ひとりの課題を園全体で確認し、指導につなげた。 ○昨年度、今年度の進路指導やその後の対応を振り返り、次年度以降に生かしていく。 ○入学検定結果を評価的に捉えるのではなく、子どもと保護者双方が前向きに進んでいけるような教師の援助を継続したい。
		7. 研究・研修	○研究部を中心に事例検討を重ねている。引き続き、子どもの姿や生活から、探究力・活用力について検討を重ねたい。 ○研究会を通して教員相互の保育観理解や子ども理解を深め、日々の保育に生かす循環ができている。 ○教員が外部の研修に参加する機会がやや少なかったので、情報収集に努め、自主的な参加の機会を増やしたい。
	学校運営（教育課程を支える諸条件）	1. 経営・組織	○園務分掌を各自が責任をもって担い、チームワークよく仕事を進めている。 ○変形労働については浸透したと思われる。教員が心身ともに万全な状態で幼児と向き合う上で、残業の多さが支障となっている。効率的に仕事を進め、勤務時間を遵守していけるよう次年度も努めたい。
		2. 出納・経理	○明朗な会計運用、経費節減に努めた。 ○年度途中で大学側のシステム見直しが行われ、交通費申請の書式ができたり検収印が必要になった。その都度、情報を確認し園内でも共有してきた。
		3. 施設・設備	○昨年度中に改修工事が完了し、園の生活環境が大幅に改善された。特に夏季のエアコン使用により快適さが増したが、保育室の湯沸かし器は冬場にもう少しお湯が出るとありがたい。 ○大規模改修後のメンテナンス費用が以前より増額することが見込まれ、今後も様々な予算上の工夫が必要となる。
		4. 健康	○メンタルヘルス調査は、専門家の意見を取り入れられる貴重な機会であり、引き続きカンファレンスを持ち連携を図りたい。 ○保護者にとってスクールカウンセラーが身近な存在になっていると感じる。
		5. 安全	○安全点検の結果を会議などで共有でき、修理・改善も速やかに行えた。防災用品も必要な買い替えや補充等を行う事ができた。毎月、確実に点検していきたい。 ○避難訓練は毎月の体験の積み重ねが子どもたちに定着している。今年度は起震車、煙体験ハウスも実施できて、保護者にも好評だった。 ○新学期には危機管理関連（アレルギーマニュアルなど）の周知を徹底していきたい。
		6. 情報	○情報担当教員の対応で管理されているが、担当者以外にも情報関連の内容を共有していきたい。 ○緊急メールシステムは定着し、活用されている。 ○ホームページは幼稚園の教育を広く伝える内容になるよう引き続き改良の努力が必要である。
		7. 開かれた学校	○PTA活動は保護者に過度の負担がかからないよう、教員との役割分担の見直しを進めた。 ○今年度は筑波大学附属特別支援学校幼稚部との交流が雨天で実施できなかった。
		8. 入園検定	○2回目の実施となる幼稚園説明会には1000人を超える参加者があり、入園希望者の出願に伴う判断材料になっていると思われる。 ○検定期間の短縮に向けて、検定方式の再検討を行うことは引き続き努力目標である。

		9. 保護者との連携	○掲示板は連絡事項や確認事項の伝達にも役立っている。行事等は園全体の掲示をすることも考えたい。また保護者の感じていることが以前より教員に伝わってくるようになった。 ○緊急メールシステムは定着して、返信も早くなっている。 ○今年度は各学期に個人面談の機会を確保し、担任と保護者の関係を深め、子どもの育ちと課題を共有することができた。
B	大学との連携	1. 連携研究	○発達臨床心理学講座の教員には様々な機会に保育を見てもらい、多方面で連携を重ねられた。 ○5歳児学年の体力測定は大学との研究協力として意義があるが、日程は忙しかった。
		2. 授業交流	○附属高生の保育参観は長年継続しており、意義があるが計画をもう少し早く知らせてほしい。 ○4歳児学年で他大学学生の読み聞かせ体験受け入れも行った。感想の提出があったのはよかった。
		3. 教育実習	○前期。後期各10名の実習生を受け入れた。 ○実習期間に運動会を入れないことで、保育の日常をしっかりと伝えられようになった。身のこなしなど「からだ」を意識することも指導していく必要がある。
		4. 専門委員会	○職員会議で必ず各委員会報告を実施し、共通理解をすることができた。
		5. 大学の講義担当	○「保育指導法」の担当、「臨床基礎実習」の参観受け入れや講師としての説明等を通して、保育現場で生活する実践者から学生に向けて、幼児教育の実際と大切な要点について発信を重ねた。 ○他大学の講義に協力し、保育の中の絵本について学生に講話を行った。
		6. インターンシップ	○副専攻の2人は誠実に保育と降園後の仕事にあたり、園にとってもスタッフとして人的貢献があり、受け入れは互惠的だった。 ○インターンシップの2人も、それぞれ真剣に取り組むことができた。
	社会貢献	1. 参観・研修受け入れ	○参観は積極的に十分に受け入れられた（国内約275名、海外約90名）。子どもの生活に支障のないよう、保育参観と施設参観に分けて受け入れた。 ○「幼児教育史学会」の参観受け入れ、他附属の養護教諭の10年研修受け入れも実施した。
		2. 公開研究会開催	○今年度は2回実施体制に戻すことができた。6月約60名、2月約80名の参加を受け入れ、幼児教育の課題について討議することができた。 ○外部講師と事前に打ち合わせし、研究発表の内容を整理することができた。協議会はいろいろな立場の参加者と保育について考える有意義な時間になっている。受付方法及び時期、年齢別協議会の進め方については、改善の余地がある。
		3. 現職研修	○8月にプロジェクト研究の中間報告発表会を行い「幼小連携部会」「相互交流型の授業・保育づくり部会」で報告を分担した。 ○エクセルの授業に参加し、様々な角度から保育や子どもについて考えたり、歴史について学ぶことができた。学外での研修はより多くの機会を確保していくようにしたい。
		4. 途上国支援	○JICAの中西部アフリカ研修受け入れは、子ども、教師双方にとって実りがあり、今後も継続してほしい。伝染病流行への細心の配慮は欠かせない。
		5. 出版活動	○紀要の発行に向け、園内研を重ね、準備を着実に進められた。 ○既刊の研究紀要「透明」「道具」を大学教員が海外に持参してくれた。今後、英訳版の発行も考えていきたい。
		6. 各種研究会への協力・支援	○保育学会では自主シンポジウム（保育環境）、ポスター発表2枚、口頭発表を行った。 ○「幼児の教育」誌に3名が編集委員として協力、執筆分担も担い、誌面充実と幼児教育に関する発信に努めた。 ○本学で開催の「アートドキュメンテーション学会」に協力し、歴史的建物見学（約50名）を受入れた。
		7. その他	○非常勤講師、旧職員、院生の協力体制ができ、歴史的資料の整理が進んだ。貴重な資料を目にすることが増え、学びの機会になっている。140周年に向けて歴史資料整理を継続していきたい。 ○「懐旧会（旧職員会）」を発足・開催できたことは、歴史的にも意義があった。

平成26年度学校評価（自己評価）まとめ（課題）

<教育課程>

- ・研究テーマを継続し、探求力から活用力へ、子どもたちがからだで学ぶ姿を大切に見取る教育実践を重ねられた。
- ・「学びの概要」の改善につなげていくことが課題である。

<大学との連携>

- ・特別経費による研究を大学と附属校と連携してすすめた。特に幼小部会では、積極的に事例を提案し、研究を深めることができた。

<社会貢献>□

- ・公開保育を実施し、全国からの参加者と保育実践と研究について討議したことで、互恵的に学び合うことができた。
- ・文部科学省の委託研究を受け、関東や全国の附属と連携して研究を深めることができた。
- ・各種学会への施設見学等に協力し、幼児教育の専門家のみならず、他領域の研究者への多様な学びの機会に貢献した。